



須江小だより

No.7

令和6年10月1日発行

「当たり前」の優しい心

校長 佐々木 淳

朝夕の風が涼しく感じられる季節になりました。

先週は1・2年生の仙台への遠足があり、各学年の体験活動なども計画通り実施されていて、子どもたちの学びが一層充実する秋を迎えました。

先月の19・20日には、6年生の福島方面への修学旅行を実施しました。

グループごとに計画を立てた自主研修や見学地での活動を存分に楽しみ、協力し合って活動することができました。事前に約束したルールや、見学のマナーを守っている姿にも感心しました。

中でも私が特に感心したのは、ホテルのエレベーターホールでの出来事です。

ホテルには他の学校や一般のお客さんなどたくさんの方が宿泊されていました。そのため、エレベーターが来ても扉が開くと人でいっぱい、次のエレベーターを待つこともしばしば。

そんな中、子どもたちと一緒にエレベーターを待っていた時のことです。

ランプが点灯して扉が開きました。中には誰も乗っていません。

さあ乗り込もうとしたとき、6年生の中から「先に譲ってあげたほうがいいんじゃない」という声があがりました。周囲を見ると、少し離れたところで、車椅子に乗っている外国人の方がエレベーターを待っていらっしゃいました。6年生はそのことに気づいていたのでしょう。

そのひと声で、子どもたちは「どうぞどうぞ」と言いながら一斉にエレベーターまでの道を開けました。外国人の方々は笑顔を浮かべ、口々に日本語で「ありがとう」と話されていました。



あとで、6年生は、この声がけを「当たり前のこと」と言っていました。

当たり前と分かっていることと、実行に移すことには大きな違いがあります。

普段から優しい心を持ち、思いやりの目で社会を見ているという姿勢がなければ、こうした行動はできないと思います。そしてすぐ理解して行動したたくさんの子供たち。

6年生の大きな成長を感じる姿でした。